〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 54　139～148（2016）〕

授業における創造的音楽学習「音の絵本」の発展的な学び
―「おはなしレストラン」での地域実践を通して―

梶　間　奈　保
（保育学科）

Progressive Learning of Creative Music Making with " The Picture Book of Sound "
through Local Practice at the Ohanashi Restaurant Library.

Department of Nursery Education, The University of Shimane Junior College

Nao KAJIMA

キーワード：音の絵本　音楽教育　実践研究　創造的音楽学習
Picture Book of Sound,　music education,　practical study, Creative Music Making

1．はじめに

保育者養成校における音楽に関連する科目には，ピアノ演奏技能を向上することを目的においた科目や歌唱の基礎や表現を高めるための科目といった学習者自身の音楽技能に焦点をあてたもの，あるいは，音楽の基礎理論や手遊びや音楽遊び，子どものための音楽活動法といった方法論を学ぶものが一般的である。しかし，幼稚園教育要領では音楽を単独とした子どもとの関わりを求めているわけではない。音楽に対する具体的な教示としては領域「表現」の中に「生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気づいたり，楽しんだりする」「感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりする」「音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」の３項目が主にあげられる。これら以外の項目には造形表現，身体表現を示唆する内容が含められているが，音楽，造形，そして身体表現を軸としながら子ども自身が感じることや考えたりする心のはたらきが重視され，子どもが自分らしく表現することを尊重されることが強調されている。一方，保育者養成校の学生たちは冒頭で述べた音楽技能や理論の学びを踏まえながらも，子どもたちの姿に照らし合わせて，音楽に特化した活動ではなく，音楽表現をより柔軟に捉え，子どもの遊びの場面において様々に音楽表現を変化させていかなければならない。つまり，演奏力や歌唱力に加え，音楽を多様に変化させることのできる創作力についても取り組み，幅広い音楽活動の展開へとつなげていく必要がある。

このように保育者を目指す学生が，自身の音楽体験や音楽の授業で培った知識や技能を活かしながら，どのようにして音楽表現を深化させていくのだろうか。さらには授業における音楽活動を学生がどのような学びとして捉えていくのだろうか。

以上のような問題意識のもと，本研究では「音の

絵本」という創造的音楽活動と関連性のある教材を通して，学生たちがどのように音楽表現を深めていくのかを明らかにし，その実践発表をどのように振り返るのかについて，授業内で行った振り返りのワークシートをもとに分析し，授業の音楽実践発表と学生の学びの関連性について考察を深めることを本研究の目的とする。

2．創造的音楽活動について

1）創造的音楽活動の課題

創造的音楽活動とは，1982年に翻訳された『音楽の語るもの』（ジョン・ペインター，ピーター・アストン著，山本文茂翻訳，1982）で取り上げられた Creative Music Making，つまり「創造的音楽学習」（駒，2013）の理念を踏襲した概念である。現在では「音楽づくり」とも呼ばれ，1989年小学校学習指導要領に取り入れられるようになった。創造的音楽活動は，子どもが主体的に音楽に関わり音楽表現をすることが目指されており，松本・山本（1985）は創造的音楽学習の根本的なねらいに「子どもが自分で判断する耳を育てる」と述べている。つまり，自分のイメージする音を表現するまでに，周りの音に気づいたり，それをどのように音楽表現へと結びつけていくのか，このような過程が創造的音楽学習の土台ともいえる。そこで，本研究では，こういった創造的音楽学習の理念を踏まえ，音楽の創作活動を「創造的音楽活動」と呼ぶこととする。

創造的音楽活動は，幼少期，あるいは学童期において音楽の活動や授業で取り扱う場面は少なく，歌を歌うことや楽器を演奏することが多い。麓（2015）は，保育において音楽創作の遊びが少ない要因に「養成校における“創作活動”の体験が少ないこと」をあげている。これは筆者が前述したように，技能向上を目的とした科目や教育実践が中心となり，保育者が身の回りにある素材や生活から音楽的要素を見出し音楽遊びへと変化させる教育の必要性を示唆している。また駒（2013）によれば，創造的な音楽活動は前述したように『幼稚園教育要領』に「表現」の項目に主に述べられているが，具体的な方法が示されてないため保育者の裁量に任されている現状があると指摘している。そして，駒（2013）が行った幼稚園における音楽活動の種類と保育者の音楽指導に関する意識調査の中で，幼稚園において創造的な音楽活動は，保育者自身「やりたい」と興味を持っていても，それを実践するにいたっていないとしている。特に保育者自身が子どもたちの「創造的な音楽活動を支えるすべがない，それゆえの不安，躊躇」（駒，2013）があり，保育者自身の創造的音楽活動の体験のなさについての指摘もある。

2）創造的音楽活動における「音の絵本」の位置づけ

本研究で取り扱う「音の絵本」は絵本の読み聞かせにあわせながら，絵本の場面をイメージした音楽や音を演奏するものである。この「音の絵本」は図1のように視覚的要素と物語、そして表現される音の3つが融合しながら展開していくため，効果音やBGMとは違った，自分の物語のイメージの音楽表現を創作する点において，上記の創造的音楽活動としての要素が非常に強い。

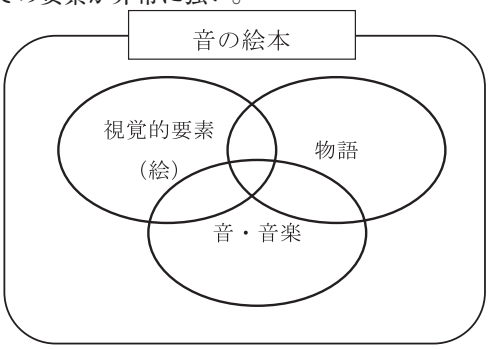


図1．「音の絵本」のイメージ

子どもや音楽経験が乏しい初心者にとって視覚や物語と音楽を結びつける音楽づくりの指導は，歌唱や演奏面など有効な手段として示唆されているが，音楽をつくるきっかけとなり得ても，音楽をつくる技法は提供されない，と高須（2012）は指摘する。つまり，音や音楽をイメージに向かって自分なりに表現する工夫は獲得できても，それが音楽を構築する理論の獲得に結びつくとはいえないのである。し

かしながら，上述したように，創造的音楽学習の土台は，イメージする音楽をどのように工夫して具現化・表現していくかが重要であり，音楽をつくる作曲的技法はまた別の段階である。

これらを踏まえると，本研究の教材である「音の絵本」は，視覚的要素を手がかりにしながら，その場面において自分でどのような音や音楽がふさわしいのか，考えていく過程が含まれる。また，自分の創作した音楽を絵本全体の統一感や物語をかき消さないように演奏の工夫やタイミングなども考慮しなければならない。一方で，音楽演奏に限った表現ではなく，絵本の視覚的要素との関連性や読み聞かせの人との連携など，音楽表現を軸としながらも様々な分野とも関連しあうこともできる。創造的音楽活動において課題とされる創作者自身の音楽技能も影響してくるが，主体的に取り組み自分たちで音楽表現を考えるのかといった創造的音楽活動として有効な教材であるといえる。

3）「音の絵本」に関連した先行研究―学校機関における授業実践をもとに―

本研究で取り扱う「音の絵本」のように，音楽と絵本，あるいは本といった視覚的要素と関連した創造的な音楽活動は，授業の中でどのように取り組まれているのだろうか。ここでは，本研究と類似している先行研究を取り上げる。

（1）幼稚園児におけるお話と音楽づくりの実践

櫻井（2013）は，年長児に音楽を傾聴させた後，その曲のイメージからお話づくりや打楽器を用いた音づくりへと展開させ，子どもたちの音づくりの活動から音楽的観点での分析を行っている。対象児は，21名の年長児で計2回の実施を行い，初回でお話づくり，2週間後の2回目には音づくりを試みている。

最初のお話づくりのきっかけとして，音楽を聴き，そこから子どもたちと実践者とのやりとりの中で，いろいろな動物が登場して楽器を演奏したり歌を歌ったりして音楽会を行う話がまとめられた。2回目の音づくりでは，登場する動物のグループに子どもたちが分けられ，1回目で作った話の流れに沿って自分たちで創作した音（ボンゴ，ハンドドラム，スズ，グロッケンシュピールなどを含む打楽器，計20種類）を入れる活動を行った。

この一連の活動の中で櫻井（2013）は，音づくりにおいて，子ども同士の会話の中に「音色」「強弱」「音域」「リズム」といった音楽要素を意識した発言や内容が含まれていると分析している。

（2）詩の朗読に合うBGM創作の実践

増井（2015）は，高校2年生の音楽選択クラス34名（男子12名，女子22名）に対し，詩の朗読に合うBGM創作の授業を行った。授業の目標として「詩のイメージやことばの響きから音楽を生み出す活動を通して，音楽的思考力や創造力の育成を図る」ことをあげ，増井自身が詩を8つ選定し，生徒は8つのグループに分かれて音楽の創作にあたった。音楽の創作にあたる授業時間数は4時間あり，5時間目に発表を行い，3つの観点から発表に対する評価を生徒自身が行った。

生徒らの創作の手法として増井（2015）は，音色の探究から構成するパターンと詩をもとにした全体構成から音色を探究するパターンの2つに分別しており，選択した詩によるところが大きいと述べている。また，生徒たちの授業に対する振り返り記述から，創作方法の発見や他者の表現からの学び合い，そして表現の技能についての知識と技能の向上などが浮かびあがり，BGM創作活動の授業実践としての可能性をまとめている。

（3）絵本に音楽を付けた活動の実践

小島（2007）は，大学生を対象とした絵本に音楽を付けた活動の実践を行っている。学生たちは，幼児教育を専攻しており，図書室にて近隣の子どもやその保護者に対して，授業の成果を発表している。数名のグループに分かれ，自分たちで絵本を選択し，創作にあたる。学生の創作の手法としては，テーマとなる1つのメロディ，いわゆるモチーフを絵本の登場する物に合わせて変化をさせるパターン，そして，絵本の場面をイメージさせるような音楽や音を演奏するパターンの2つがあげられている。

学生らはギターやピアノ，オーボエなどを取り入

れ，絵本の読み聞かせと共に演奏したり，絵本のフレーズを歌にして発表を行った。この実践活動の中で小島（2007）は「調性的な音楽ではなく，音を自由に使いこなして作る感覚的な音は，絵本には大事な要素である」とし，即興的なフレーズ挿入の演奏や調性感をはなれた音の使い方について課題としてまとめている。

さらに，小島（2009）は，個人の絵本に対するイメージと音楽との結び付きに着目し，実践活動を行った。対象学生は，音楽教育を専攻する学生１名とその他の教育を専攻する学生７名の計８名で，電子ピアノを用いて音楽の創作を行った。その結果，学生らが絵本の何処に着目したのか，創作された音楽をもとに小島が考察を行い，「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の６点が音楽の着想の源になっていると明らかにした。また，実践した学生からは「イメージはあるが演奏技術が足りず」といった自身の音楽的イメージとそれを可能にする演奏，あるいは音楽創作などの課題があがったことも明らかにされた。

（４）絵本を用いた音楽づくりの実践

三輪（2013）は，保育者養成校において絵本「すてきな三にんぐみ」を題材とした音楽づくりの実践を行った。この実践では，あらかじめ実践者が絵本の雰囲気に合う曲を提示し，それを元に学生らがリズムや奏法を工夫していくプロセスが組まれた。その他にも，五音音階を使う，全音階を使うなど場面において音楽的なルールを設け，スムーズな活動展開と学生自身の内的な音楽経験がいかに表現と関わりを持つのかを明らかにすることが目的とされた。その結果，ルールに縛られて自身の思い描いていたイメージとどのように結びつけていいのか分からない状態や，形式を整えることに重点が置かれ，自身の内的な経験との結びつきが不明瞭として，ルールの方法や設定について課題をあげている。一方で，図形楽譜を用いて音づくりを行う活動は全員のイメージが共有化できる活動であったと述べている。

４）創造的音楽活動の取り組み実践事例のまとめ

以上の例から，創造的音楽活動における音楽と絵本（もしくはその他の視覚的イメージの要素）を結びつけた授業の展開では，音楽創作者の音楽技術との関連性が共通の課題としてあげられる。例えば，小島（2007）の実践活動のまとめに「音を自由に使いこなして作る感覚的な音」とあるが，学生自身の音楽経験の中に，そういった体験がなくては音楽創作の手法として見出すことは難しい。また，既存の曲，あるいは学校教育の中で一般的に取り扱われる楽曲は，調性の保たれた楽曲が多いことも調性のあるフレーズにこだわる要因かもしれない。

また，使用する楽器によって音楽創作の手法も変化してくるといえる。鍵盤楽器が難しい子どもであれば打楽器が使用され，大学生であれば自分の楽器経験によって選択する楽器も様々である。そのため，打楽器を中心に音づくりをすれば，音の強弱や奏法といった音質的な内容を意識し，鍵盤楽器や音階が奏でられる楽器であれば，旋律や調性を意識した音楽創作になる傾向は強いのではないだろうか。

一方で，授業の分析的手法として，学生の創作した楽曲を用いて考察をする音楽表現分析のパターン，そして子ども同士の会話や授業で活用したレポートなどの言語分析パターンの２つの方法で，音楽の創作活動について検討している。

このように，音楽と視覚的要素（本研究の場合では絵本を対象とする）を用いた授業の実践研究においては，以下の３点の実践内容との関連性が高く，これらに着目し，本研究の授業実践を分析していく。

・音楽的能力（主に音楽創作や演奏技能）
・演奏（選択）楽器が創作に与える影響
・創作者自身の絵本に対するイメージの内容

さらに，「音の絵本」に取り組んだ学生たちがどのように音楽表現を深め，自身の学びと関連しているのかについて学生の振り返りの記録をもとに考察を行う。なお，本研究で取り上げた学生の「音の絵本」の創作活動については，梶間（2015）によって報告されている。そこで本研究では，実践発表を取り組んだ後の学生の振り返りワークシートの内容

について中心に分析していく。

3．研究の方法

本研究の目的は，創造的音楽活動である「音の絵本」の実践活動を通して学生がどのような学びをしたのかを明らかにするために，ワークシートの記述内容について分析し考察していく。

1）方法

（1）対象者

本学保育学科　2014年度後期授業「音楽ⅡB」受講者8名（男子2名・女子6名）

（2）実施時期

「音楽ⅡB」の授業の最終時に，受講者全員が音の絵本振り返りワークシート（以下，ワークシート）に記入した。(2015年1月29日)

2）実施内容

学生が実施したワークシートの内容には，音の絵本の実践活動に関して具体的に振り返ることがきるよう，また，自分達の発表をビデオを通して具体的に振り返ることを意識した自由記述の設問を5項目設けた。さらに，音の絵本の実践発表についての自己評価と音の絵本の実践で重要な要素を5段階評価法で記入する設問10項目を取り入れた。なお，ワークシートを研究で用いることについて口頭で説明の上，対象者からの同意を得た。

3）分析方法

ワークシートの記述内容の分析にあたっては，5問の設問の回答欄に記述された内容を文章ごとに区切り，類似した文章内容をいくつかに分類しまとめた。また，5段階評価の質問項目については得点を集計した。

4．結果と考察

1）「音の絵本」の取り組みについての感想

右記の図2－1は，音の絵本の取り組みをどのように感じたのかについて記述内容をまとめた棒グラフである。音の絵本の取り組みによって，音楽に対する魅力についての記載が14件，次いで，絵本に対する魅力についてが6件，そして，読み手側の変化についてが3件あがっていた。その他，絵本に対する集中力，活動の課題について，実践活動そのものについての記載がそれぞれ2件だった。

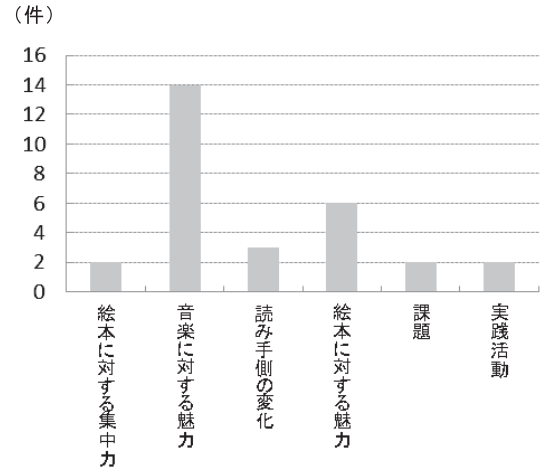


図2－1．音の絵本で取り組んで感じたところについて（自由記述より）

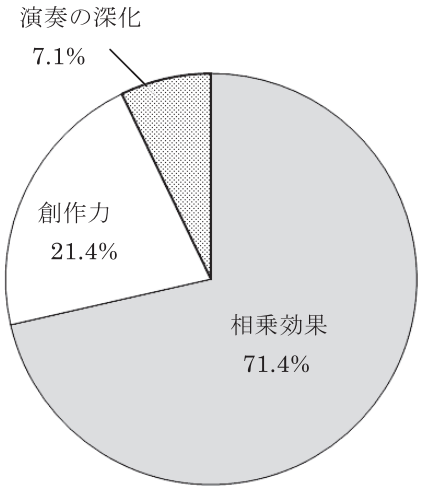


図2－2．「音楽に対する魅力」に関するカテゴリ分別の割合

上記の図2－2は，図2－1の「音楽に対する魅力」カテゴリの中で，具体的にどのような魅力だったかについての割合のグラフである。「音楽に対する魅力」群の中で，絵本に音楽が付随することによ

る「相乗効果」に関する記述が 71.4%。次いで，音楽の創作に対して面白さを感じた「創作力」については21.4%，そして「演奏の深化」についてが7.1%であった。

それぞれの項目に分別した記述内容について，以下に抜粋したものを記載する。

【相乗効果】
・音を重ねることで，絵本を見て創造するときよりもより一層イメージをふくらませることができた
・声のトーンや抑揚だけでは表現しきれない部分を表現することもでき，盛り上がりの場面を演出できる
・絵と声だけでなく音楽が入ることによって，より楽しく，物語を感じることができた

【創作力】
・いろんな楽器を使うことで，いろんな種類の音を表現することができるし，楽器を組み合わせたり，リズムをそれぞれ変えてみたり同じにしてみたりなど，工夫をすることでもっと楽しめる内容になってくるのだと思いました
・絵本の内容に関係した音の楽器を使ったり，ピアノのメロディーを考えたりし，音楽の面白さを感じることができました

【演奏の深化】
・色々な楽器を試したり，鳴らし方を工夫したり，楽器や鳴らし方を工夫するだけで，全体の雰囲気がガラッと変わるので，とても面白い

2）音の絵本実践の難しさや課題について

次に，図２－３は音の絵本について難しかったところや課題についてまとめたもので，音楽の創作に関する内容の記載が15件，絵本のイメージとの関連性について８件，発表の流れや準備については５件，演奏に関する記載が２件であった。その他については，難しかったと感じながらも充実感や達成感に関する記載がみられた。

音の絵本の実践の難しさや課題についても，一番多く記述されていた「音楽の創作」について，図２－４に具体的に記述内容をカテゴリ分別した割合を示したものをグラフにまとめた。「音楽の創作」群の中で，自身で絵本から喚起されるイメージを具体的にメロディや和音，音にする作業の「イメージ創作」に関する記述が53.3%。次いで，音の絵本で使用した「音（音楽）の有無」についてが26.7%，そして挿入する「楽器の選択と演奏」については20%であった。

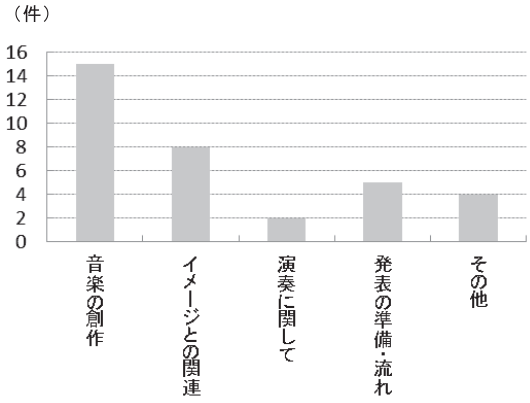


図２－３．音の絵本の実践の難しさや課題について（自由記述より）

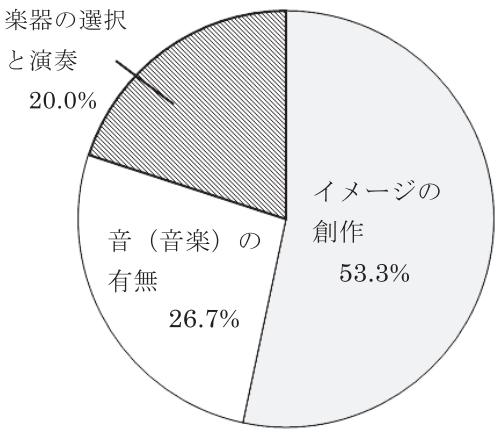


図２－４．「音楽の創作」に関する記述カテゴリの割合

それぞれの項目に分別した記述内容について，以下に抜粋したものを記載する。

【イメージの創作】
・いちように緊張感を伝えたいといっても，ただまじめにシリアスな雰囲気を伝えるという訳ではなく，今回はコミカルさをつけたかったのでその中でどう表現していくかということが難しかったです
・音の種類が少なく絵本の中で使いまわしていたので，もっと様々な種類の音があったら，子どもたちをさらにひきつけることができたのではないか

【楽器の選択と演奏】
・使用する楽器や鳴らし方によっても雰囲気が異なってくるので，どの音が一番合っているのかを考えるのが難しかった
・課題としてそれぞれの楽器を鳴らす時に，場面に１つの楽器しか使っていなかったところもあったので，音を重ねてみたり，大きくするところや小さく静かにするところなど，もう少しメリハリをつけて表現することができると良かったなと思います

【音の有無】
・入れすぎても，ずっと音がなっていてうるさいし，入れなさすぎても，音の絵本の意味がなくなるので，そこのバランスがけっこう難しかった

3）自分たちの工夫の仕方について

音の絵本の実践に関する自分たちの工夫については，具体的に音楽の創作活動に関する記述内容を図２－５に示しているように，「音」「楽器の選別と演奏」「構成」「リズム」の４項目に分類し，それをグラフにまとめた。

音の高低の変化や音質の表現の工夫などに関する「音」については33.3%，「楽器の選別と演奏」も33.3%，創作した音楽の「構成」については25.0%，「リズム」の工夫については8.3%であった。

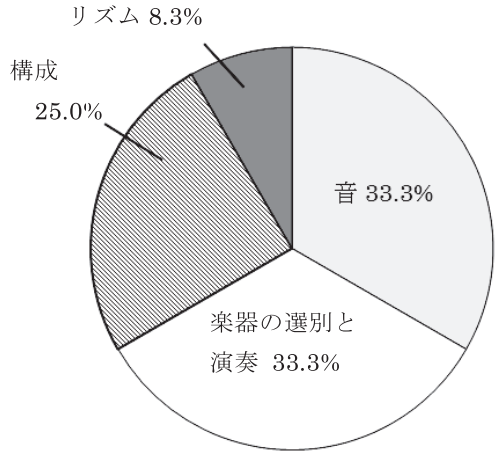


図２－５.「自分たちの工夫」に関する記述カテゴリの割合

それぞれの項目に分別した記述内容について，以下に抜粋したものを記載する。

【音】
・子犬のマーチを場面に合わせて低い音と高い音ですることによって場面の暗い明るいを表現した

【楽器の選別と演奏】
・絵本自体がおもしろい内容なのでコミカルなイメージで楽器の使い方をしました

【構成】
・ねずみとねこのやりとりが繰り返し行われるので，同じリズムでも音の高さなどを変えて繰り返しの面白さが伝わるよう工夫しました
※【音】に関する内容も含む

【リズム】
・最後は話し合っていたで終わるので，ポクポクで終わらせてみました

4）音の絵本実践の自己評価

次に５段階評価の質問項目の自己評価について，表１に各項目の平均値と標準偏差を示す。

音の絵本の実践の自己評価では，「実践発表は楽

しかった」が平均4.75と一番評価が高く，「発表はうまくできた」については平均4.13であった。「グループで連携がとれた」と「しっかり練習できた」については，それぞれ平均4.25と平均4.13となった。

表１．音の絵本実践の自己評価　　（ｎ＝８）

項目	平均	標準偏差
発表はうまくできた	4.13	0.33
実践発表は楽しかった	4.75	0.43
しっかり練習できた	4.13	0.60
グループで連携がとれた	4.25	0.66

５）音の絵本実践で重要な要素

音の絵本実践においてどのような要素が重要かについて，９項目に５段階評価をさせた平均と標準偏差の結果を以下の表２に示す。

表２．音の絵本実践で重要な要素　　（ｎ＝８）

項目	平均	標準偏差
題材選び	4.38	0.70
楽器選択	4.75	0.43
読み手	4.50	0.66
音の大きさ	4.25	0.66
音楽的表現（メロディや和音）	4.00	0.87
効果音的表現	4.38	0.48
発表する場所の雰囲気	4.00	0.71
対象者の年齢	3.25	0.66
本の大きさ	4.13	0.78

全体的に各項目に対して重要性を感じている学生は多く，特に「楽器選択」や「読み手」といった部分の平均が高い。一方，「対象者の年齢」については，項目の中ではやや低い平均値であった。

次の図２－６は，音の絵本実践で重要な要素の評価をレーザーグラフにまとめたものである。図２－６を見て分かるように「対象者の年齢」は，他の要素に比べてあまり重要ではないとみることができる。また，その他の要素は，それぞれ音の絵本を実践する上で重要であり，特に「楽器の選択」や効果音やメロディ，和音といった音楽的表現について数値が高いことが分かる。

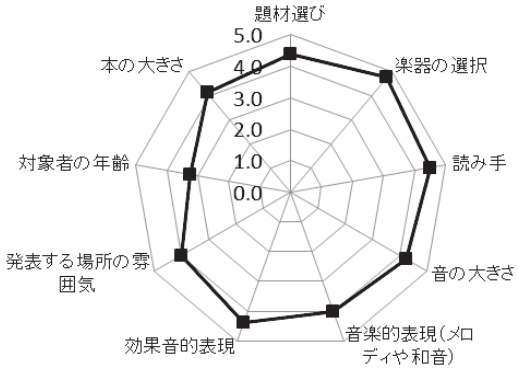


図２－６．音の絵本実践で重要な要素

５．総合考察と今後の課題

１）先行研究との比較

先述した先行研究のまとめでは，音楽と視覚的題材を対象とした創造的音楽活動において，音楽を創作する際には，創作者の音楽技術と音楽経験が大きく影響していること，つまり，音楽的能力との関連性があげられた。

学生らのワークシートの結果からも，音楽の創作に関する難しさを指摘する学生が一番多かった。ワークシートの自由記述には「メロディは自分たちで創るのも難しく，すでにあるものの中から」「ピアノでメロディをつけたりしましたが，どんな音がいいのか考えることが大変」など，自分たちの思い描く音楽へのイメージをどのように具体的に音にし，リズムや和音を付けたりするのかといった部分に苦慮していた様子であった。

また，使用する楽器と音楽創作との関連性については，今回はグループでの活動であったため，鍵盤楽器が得意な学生はピアノでの創作活動を中心に，それ以外の学生は打楽器での創作活動を中心に進めており，少なからず自身の楽器経験によって選択する楽器にも違いはあったといえる。しかし，記述内容に「あまりイメージに合う楽器が無い場合は，音の大きさや演奏方法を工夫して音を鳴らし，イメー

ジに近づけるようにしました」「使用する楽器や鳴らし方によっても雰囲気が異なってくるので，どの音が一番合っているのかを考えるのが難しかった」など，音楽のイメージに沿った楽器選択や演奏方法を意識していることが分かった。併せて，グループでの発表ということもあり，「絵本を読む人と楽器を演奏する人全員の息を合わせないといけないので顔を見合してタイミング良くすることが大切」といった連携の部分や，「もっと楽器をうまく組み合わせてリズムをつけるともっと良くなったのではないか」など，実践を通して他楽器とのアンサンブルの面白さや可能性を感じているといえる。

2）音の絵本実践の特徴

今回，学生らのワークシート分析から，授業における音の絵本の実践活動は次の5点にまとめることができる。

①発表者，実践者共に音，音楽の効果や魅力を実感する機会となり得る
②音楽の挿入の必要性を吟味する視点を持つ
③場面に合った音楽とBGMとの差別化を図る
④物語の構成と音楽の構成，場面のにぎやかさと音程や楽器の数との関連性を見出す
⑤楽器の音質へのこだわりやバランスなどを意識する音楽表現の向上

①については，多くの学生が絵本の読み聞かせに音や音楽が入ることで，子どもたちの集中力をかき消してしまわないか不安に感じていたが，実践や観客のアンケートを通して，音があることでより子どもたちが絵本の世界に入り楽しんでいたという実感を持てたといえる。③④⑤については，音楽創作では重要な要素であり，音楽の形式やアンサンブルのバランスを創作活動の中で自ら気づき意識して取り入れていくためには，音楽技術や音楽経験との関連性が非常に高いといえる。しかし，今回は絵本及び物語という題材から，そういった音楽の構造的な部分を意識することが自然に行われたことは，音の絵本実践の特徴ではないかといえる。

さらにBGMではなく，より明確な意図を持った音楽の創作や楽器の音質へのこだわりなど，自分たちが絵本のイメージを強く持っているからこそ現れた要素である。

特に，②の音楽の挿入の必要性を吟味する視点においては，通常の音楽作品であれば，冒頭から音楽終了まで音が流れていることが一般的である。しかし，場面によっては音楽の必要のない箇所，つまり，読み聞かせを際立たせたい箇所もあり，それらがあることでより音楽の良さや効果が現れるといえる。そういった効果を学生らは，絵本や物語を手掛かりにしながら，音楽の創作の視点を見出し実践していったといえる。

以上のように，学生らが自らの音楽に対するイメージに近づけながら音楽を創作し，音の取捨選択をしていく活動は，松本・山本（1985）が創造的音楽学習の根本的なねらいとしてあげた「子どもが自分で判断する耳を育てる」ことに，強く関連しているといえるのではないだろうか。

3）今後の課題

今後の課題としてまずあげられるのが，学生らの音楽創作実践で難しいと感じた部分をどのように支援していき，より充実した創造的音楽学習へとつなげていくのかという教員側の視点である。音楽の創作活動は，学生自身の音楽経験や技能とも深く関連してくるが，自分たちのイメージを音や音楽にしていくためには，授業内で様々なアプローチを行い，学生自身が創作活動を意欲的にするための方法を組み立てていく必要があると感じた。

また，学生自身が音楽を創作していく機会を作りながら，それらを保育現場で活かすことのできるよう，「音の絵本」の教材化について，より深めていかなければならない。今回の授業をイベント的に捉えるのではなく，子どもたちとの「音の絵本」の実践との関わりの中で感じたことや学んだことを現場で実践し，学生，子どもたちが互いに創造的な音楽活動として深めていくために，継続した地域実践を学びの場として位置づけていきたい。

引用文献

1）麓洋介「保育者養成校における音楽教育についての位置考察―「実技」「楽典」「表現」の関連付けによる総合的・段階的な指導のための授業モデル―」愛知教育大学研究報告，教育科学編，愛知教育大学，vol.64，p.21-26，2015.
2）花原幹夫「新　保育ライブラリ　保育の内容・方法を知る　保育内容　表現」北大路出版，2009.
3）梶間奈保「音楽教材「音の絵本」発表を通して音への興味関心を育む試み―「おはなしレストラン」での地域実践を通して」しまね地域共生センター紀要，vol. 2，p.73-80，2015.
4）小島千か「絵本と音楽 ―子ども図書室での学生による発表を通して―」山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要，vol. 12，p. 1 -12，2007.
5）小島千か「絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき」山梨大学教育人間科学部紀要Vol.11，115-125，2009.
6）駒久美子「幼児の集団的・創造的音楽活動に関する研究―応答性に着目した即興の展開―」ふくろう出版，2013.
7）増井知世子「音楽科における想像力の育成―詩の朗読に合うBGMの創作を通して―」音楽教育実践ジャーナルVol.13（1），2015.
8）松本恒敏，山本文茂著「創造的音楽学習の試みこの音でいいかな？」音楽之友社，1985.
9）三輪雅美「音楽づくりを用いた保育演習の試み2―絵本「すてきな三にんぐみ」における実践―」日本学校音楽教育実践学会紀要，vol.17，p.285-286，2013.
10）文部科学省「幼稚園教育要領」2008.
11）文部科学省「小学校学習指導要領」2008.
12）櫻井琴音「幼稚園における音楽表現活動に関する一考察―お話と音づくり―」西九州大学子ども学部紀要，vol. 5，p.31-38，2013.
13）坪能克弘，坪能由紀子，高須一他編著「音楽づくりの授業アイデア集音楽をつくる・音楽を聴く」音楽之友社，2012.

（受稿 平成27年11月 9 日，受理 平成27年12月24日）